

2023 年度後期 授業アンケートに対する文学研究科長・専攻代表からのコメント

<文学研究科長・専攻代表からのコメント>

■文学研究科長 土肥 伊都子

大学院の授業アンケートは、2022 年度より方式を変更し、回答者の匿名性を保証するために、文学研究科のどの専攻の院生からの回答か、あえて明らかにしない形で結果を出している。そのため教員も専攻代表も、授業アンケート結果が当該専攻の院生のものであるかどうかは明らかでない。こうした事情を踏まえて、各専攻代表からのコメントをまとめ、研究科全体としての評価をしたい。

まず、授業担当者の自己点検・自己評価からは、それぞれの授業が、受講生にとって最大限の成果が生まれるよう運営され、授業設計にも尽力されていることが伺われた。これは、大学院生の授業アンケートの結果で、授業に対する評価が概ね高かったことから確かなことと思われる。

気になる点として、授業アンケートにおいて、授業の準備に十分に時間を割くことができなかつたという回答が少なくないことと、授業内でのディスカッションのあり方について、やや否定的な評価の記述がみられることが国語国文学、心理学の両専攻代表から指摘されていた。特に、ディスカッションについては、一部の授業で教員の議論に対する批判的な態度から院生が意見を言いづらい雰囲気がある、とのコメントがあった。教員が教育として批判したものが、受講者にとっては意見を言いづらい雰囲気であると認識させてしまっているのであれば、活発な議論はできにくくなる。大学院生とのコミュニケーションを十分にとり、彼らの理解度も勘案しながら、議論を促す必要がある。

■英語学専攻代表 Philip Spaelti

The evaluations returned have mostly quite high scores, which is a positive result. However since only one of the 21 returned evaluations are from English major students we must be careful in interpreting the results. Among the specific comments, students mentioned the advantage of being in a small class, which makes it possible to focus on their needs.

Teachers also mentioned that having few students made it possible for them to adjust the content to the students' needs.

This will be the last year for the English major.

■国語国文学専攻代表 田附 敏尚

学生の授業評価の結果は、ほとんどの項目で良い評価が下されており、全般的には問題がないように見える。8(1)「教員と院生の間で、活発な議論ができた」という項目では、「議論することよりは、感想を話したりすることの方が多かったと思う」というコメントがあった。感想を話すことは議論の種を孕んでいるものでもあるので、それ自体が悪いわけではない。ただ、そこで一步踏み込んで考えてみることは必要であり、院生自身がそのような思考を身につけなければならないものでもある。専攻としても、成長を促していきたい。また、「一部の授業で教員の議論に対する批判的な態度から院生が意見を言いづらい雰囲気があるものもありました」というコメントもあった。こちらは複数の読み方ができ、真意は掴めないが、受講者に意見を言いづらい雰囲気であると認識させてしまっているのであれば当然活発な議論は望むべくもない。教員がもし批判的な態度を取っているならば、(批判的というのが必ずしも悪いわけではないだろうから)批判的態度の理由も説明し、その上で議論を促す必要があるだろう。

各担当の自己点検評価を概観しても、さして悪いものは見当たらない。授業運営はおおむね良好に行われているようである。

今後の授業改善については、さらに質を高めるためのコメントが目立った。その中で、院生のこれまでの学習スタイルに言及するものがあった。さまざまな背景・経歴を持った大学院生が今後も入ってくると考えられる以上、学習スタイルもさまざまであり、何を教えるか(教えなくてもよい)もそれに応じて変えていく必要がある。一概にこうするとは言えないが、あるいは修士課程における研究の基礎を一括して教える授業が必要になってくるのかもしれない。今後の課題としたい。

■心理学専攻代表 小松 貴弘

自己点検評価からは、授業担当者それぞれに、それぞれの授業に相応しい授業運営のあり方を模索しながら授業設計に腐心していることがうかがわれる。学生への授業アンケートの結果からは、授業に対する評価は概ね高いことをうかがうことができる。その一方で、授業の準備に十分に時間を割くことができなかつたという回答が少なくないことと、授業内でのディスカッションのあり方について、やや否定的な評価の記述がみられることは気になるところである。

授業の準備に十分に時間を割くことができなかつたという意見が少なくないのは、心理学専攻のカリキュラムの構造上の課題の反映でもある。専門職の資格試験の受験資格の取得を目指すカリキュラムであるために、学生が受講しなければならない科目は多く、また学内実習と学外実習が必須のため、そちらにも多くの時間を割かざるを得ない。さらに、今年度から公認心理師国家試験が修了年度の3月初めに実施されるようになったことの影響もかなり大きい。学生の学びにとって適切な科目ごとの授業運営とカリキュラム運営を専攻全体として再検討していきたい。

ディスカッションに関する否定的評価も上記の点と無関係ではないとも考えられる。授業内に限らず、学生同士並びに学生と教員間のコミュニケーションを深める機会と時間を確保して

いくことが、専攻が目指す専門家養成の観点からも今後さらに重要になってくることが考えられるため、上記の点と並行して対応のあり方を検討していきたい。

■言語科学専攻代表 土肥 伊都子

本専攻の科目担当者は2名のみで、また、学生も1名のみであった。

そのため、両授業とも、博士論文を作成する段階の学生主体の授業運営になったようである。ただし、予定していた講義内容と、学生の研究対象や興味とを、うまく調整して授業を行っており、こうした授業運営は、博士課程の学生にとって最適なものと評価できる。

具体的には、学生からの質問に答える、学会発表のための助言をする、博士論文に関する相談に乗る、といった熱心な指導がなされていた。教員は、学生は非常に熱心に受講していたと自己評価しており、申し分ないと思われる。